

アイヌの物語と口承の歴史

アイヌは、伝統的に口承によって歴史と伝統を保存してきました。世代を超えて受け継がれてきたこれらの物語は、しばしば人々と「カムイ」（神々）との深いつながりを反映していました。

あるアイヌ伝説は歴史的な出来事を神話的に解釈したものでした。旭川に伝わる物語の一つでは、カッコウが津波の到来をアイヌの子供に警告します。子供と母親は共に山に逃げ、松の木に隠れます。翌朝には多くの家が流されていましたが、彼らは鳥の姿をした「カムイ」であるカッコウのおかげで無事でした。この物語は 1834 年に石狩湾を襲った津波に関連していると考えられています。

物語と叙事詩

アイヌの口承物語は、英雄叙事詩、神謡、散文説話の 3 つの大きな分類に分けられます。「ユーカラ」として知られる英雄叙事詩は、劇的な状況下での勇敢な主人公の物語です。語り手は独自の旋律で歌い、木製の拍子木で強調を付けます。「カムユーカラ」または「オйна」と呼ばれる神謡は、「カムイ」の視点から語られます。これらは繰り返しの旋律で歌われ、しばしば擬音語の後コーラス部を含みます。「ウエベケレ」や「トウイタク」と呼ばれる日常的な散文説話は、会話調で語られます。その中には、人間と「カムイ」との関係に焦点を当てた教訓譚も

あります。

物語を通じた文化の保存

1869年に始まった明治政府の同化政策は、アイヌの言語と伝統を抑制し、このような語り継ぎの形式を衰退させました。しかし、知里幸恵（1903 -1922）による『アイヌ神謡集』（アイヌの聖なる存在の詠唱集）などのように、アイヌの研究者たちがこれらの物語を文字に記録する努力をしたことで、多くの物語が後世に残されることになりました。